

演 題	ライフスタイルに合わせた 上手な老健の使い方
副 題	「また来るね！」が合言葉

フリガナ	カイゴロウジンホケンシセツハマナス
施 設 名	介護老人保健施設はまなす
フリガナ	カイゴフクシシ スズキナナミ
発表者(職名・氏名)	介護福祉士 鈴木奈々美
フリガナ	フクダリッカ ホカハマナスショクインイチドウ
共同研究者	福田六花 他はまなす職員一同

【はじめに】

当施設のある富士河口湖町や周辺地域は、夏は涼しく冬は寒さが厳しい環境にあり、観光業も盛んな地域である。このような環境の中で、開設当初より利用者や家族のライフスタイルに合わせて老健を活用し、在宅生活を継続することが出来ているケースが多くみられている。その中から、代表的な例をいくつか紹介する。

【紹介】

ケース1：在宅から夏季入所

- ・家業が旅館経営のため、家族が夏季多忙にて介護困難のため入所となった。
- ・秋に在宅へ復帰し、毎年夏季には入所を利用。

ケース2：在宅から冬季入所

- ・家族が夜勤を含む変則勤務のため、夜間や日中独居となる事が多い。
- ・冬季の寒さのため、体調管理・転倒リスクが高く入所となった。
- ・春に在宅へ復帰し、今季も冬季入所を予定。

ケース3：病院から入所

- ・病院退院時、在宅生活能力の低下・介護困難にて入所となった。
- ・在宅復帰に際し、住環境から冬季の在宅生活を心配されていたが、退所後の関わり方法を説明し、スムーズに在宅へつなげられた。
- ・春に在宅へ復帰し、通所リハビリを利用。冬季入所を繰り返されている。

ケース4：在宅から夏季・冬季入所

- ・病状にて、暑い時期寒い時期は体温調節が難しく入所となった。
- ・春・秋は、在宅にて過ごしており、そのスタイルを継続している。

【老健としてのサポート】

- ・カンファレンスにて、家族への在宅復帰後の支援継続への提案。
- ・在宅への訪問指導の実施、在宅復帰に必要な課題の明確化、課題に向けた多職種での取り組みの実施
- ・外出外泊支援
- ・入所・通所・ショートステイとの連携

【結果】

- ・入所にて短期集中的にリハビリ支援を行い、介護職の生活への効果的な支援により、生活能力の改善がみられ、在宅生活をスムーズに継続することが出来ている。
- ・在宅復帰に対する家族の不安を軽減し、家族も在宅復帰に前向きになった。
- ・入所から通所、通所から入所と、途切れなくリハビリ支援を行うことで、能力の維持向上を図ることが出来た。それにより、転倒の危険性が減り安心して在宅で過ごすことが出来た。
- ・個々のライフスタイルに合わせた支援をすることで、在宅生活を継続することが出来ている。
- ・利用者自身の自信に繋がったり、在宅に帰ることで家事動作への意欲が高まり、さらに能力の向上がみられているケースもみられる。

【考察】

今回紹介した、老健を活用しながら在宅生活を継続出来ているケースには、家族の協力が不可欠である。利用者だけでなく、家族の思いを理解し、老健との信頼関係を築くことが大切と考える。家族が在宅にて介護をすることは、24時間心配が絶えず、精神的・身体的な負担も少なくない。そのため、カンファレンスでは、入所時の家族の関わり方の提案や在宅へ復帰した際の施設と関わり方の提案をしている。また、再入所できる可能性も伝え、家族が安心感をもって在宅で受け入れられることが出来るよう、個々の状況に応じて共に考え、アドバイスを行うことが重要である。

【まとめ】

一人でも多くの方が住み慣れた我が家を中心として意欲的に生活できるよう、それぞれのライフスタイルに合わせた支援を行うことが必要である。一度入所すると、そのまま施設生活を続けるというイメージを持っている方も多いが、必ずしもそうではない。慣れ親しみ、住み慣れた家での生活を続ける為の地域の拠点となるような老健を今後も目指していきたい。